

2024 年度 大学入試動向

2023年12月の大学入試センターの発表によると、高校等新規卒業見込者は▲4.4%、共通テストの志願者は▲4.0%であった。一方、2024年度入試は、旧学習指導要領による最後の入試で、“後がない入試”と言われた。このような状況下で迎えた2024年度入試は、どのような展開になったのであろうか。大学新聞社では、3月下旬までに判明した志願状況をもとに、2024年度入試を分析した。

総合型選抜・学校推薦型選抜

文部科学省から発表になった、1年前の2023年度の入学者選抜状況の概要をまとめたのが下のグラフである。

【総合型選抜】 国立大の志願者数は8ポイント増加したが、合格者数は6ポイントの増加、公立大の志願者数は13%増加したが、合格者数は11%の増加とやや難化傾向となっている。一方私立大の志願者数は4%増加したが、合格者数は9%増加と逆に易化傾向である。

【学校推薦型選抜】 2020年度以降易化が続いている。国公立大では志願者数・合格者数ともに増加しているが、志願者数よりも合格者数の増加幅が大きい。一方、私立大は志願者数・合格者数ともに変化がない。受験生に人気があるのは指定校推薦だ。「早めに、安全に合格したい」という受験生心理から今後も人気は継続するだろう。何としても現役で合格したいということで、ワンランク下げても受験する“安全志向”は今後も継続するだろう。

2024年度は、大学新聞社が調査した状況では、国公立大の志願者数は2023年度と同様の傾向で、総合型選抜は6%前後増加しているが、学校推薦型選抜は横ばいで推移している。私立大の志願者数は総

合型選抜では4ポイント前後増加しているが、学校推薦型選抜はやや減少している。年内入試と言われる総合型選抜と学校推薦型選抜は総合型選抜が志願者を集めている。受験生の早めに合格を決めたいという考えと受験生の学力負担(入試科目等)が軽いことが影響しているだろう。

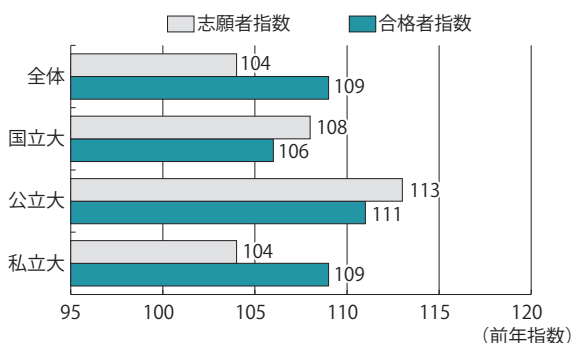
新学習指導要領による初めての入試となる2025年度選抜の動向は、基本的に2024年度に準じた展開になるだろう。しかし、さらに現役中心の入試になるので、志願者数全体では減少するとみられる。合格のポイントは高校入学時からの着実な学力の蓄積と情報収集、小論文や面接対策への早めの取組みだ。

一般選抜

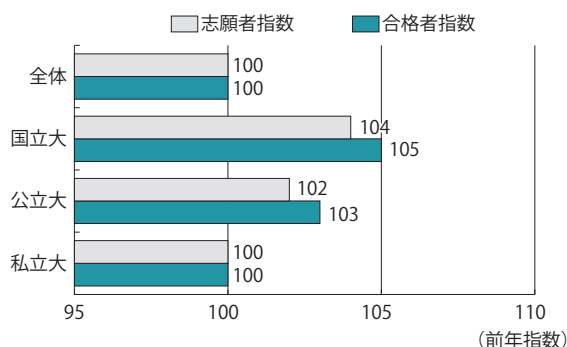
《国公立大》

過去5年間の志願者数を前年指数(前年を100とした指数)で見ると、101→94→97→101→100と推移しており、2024年度は横ばいである。昨年12月に発表になった共通テストの確定志願者数は4.0ポイント減少(現役生は4.0ポイント、既卒者は4.8ポイントの減少)だったにもかかわらず、志願者の減少はなかった。国公立大の根強い人気がかかわれる。

■令和5(2023)年度総合型選抜
志願者数・合格者数の前年指数



■令和5(2023)年度学校推薦型選抜
志願者数・合格者数の前年指数



旧7帝大を含む難関10大学では、893人増の前年指数101で、大幅に増加したのは、東北大(+456人)、京都大(+379人)である。京都大は2023年度も257人の増加と人気が続いている。

志願倍率は全大学では3.9倍で、高いのは、国立大では(6倍以上)、東京芸術大(7.8倍)、旭川医科大(7.1倍)、横浜国立大(6.4倍)、滋賀大(6.3倍)、北見工業大(6.1倍)、奈良教育大(6.1倍)、電気通信大(6.0倍)となっている。公立大では(8倍以上)、岐阜薬科大(15.1倍)、下関市立大(10.4倍)、奈良県立医科大(8.6倍)、山陽小野田市立山口東京理科大(8.5倍)、三重県立看護大(8.3倍)、旭川市立大(8.2倍)、都留文科大(8.2倍)、宮崎公立大(8.1倍)、釧路公立大(8.0倍)となっている。

学部系統別の前年指数を見ると、「人文・社会」101、「理工」100、「農・水産」96、「医・歯」101、「薬・看護(医・歯を除く医療系を含む)」96、「教員養成」98、「その他」106、となっている。「その他」はデザインを含む美術系、体育系、情報系、新設分野である。

《私立大》

2024年度の志願者数は前年指数100と横ばいである。内訳は、一般選抜が99、共通テスト利用が103となっている。2021年度に86と過去にない大幅減少、2022年度は101とやや回復し、2023年は96だったことを考えると、マクロ的には易化が続いている。易化した2021年度のレベルが続いているのが現状だ。

日本私立学校振興・共済事業団の発表によると、2023年度選抜では、入学定員が0.9ポイント増加したものの志願者は2.8ポイント減少している。少子化から今後も志願者数の減少が続くだろう。そのような状況から、推薦(総合型・学校推薦型選抜)による入学者の割合は2022年度51.66%から2023年度は53.20%へと大幅に増加している。定員割れ学校数は37校も増加し320校となり、割合は半数を超える53.3%となった。2024年度の志願者のマクロ動向は、上位校は志願者を前年並みに集めているのに対し、下位校は集めていない。そのため、定員割れ校数は増加するだろう。

2024年度は共通テストの総合点のややアップの影響を受けて、共通テスト利用が前年指数103と前年より増加した。これは、国公立志望者が難関私立大の併願校数を増やしたことが要因だろう。その結果、難関私立大においては一般選抜が減少、共通テスト利用が増加というパターンが多かった。

地区別の前年指数は、北海道地区2023年度92→2024年度93、東北地区同89→93、関東地区

同98→101、中部地区同91→101、近畿地区同97→99、中国・四国地区同87→109、九州地区同94→94となっている。「ウィズ・アフターコロナ」への変化から、都市圏難関大への回帰がみられる。

系統別では、文系の回復が見られる。隔年現象の影響もあるだろう。「法・政治系統」が2023年度の91から102と志願者数がやや回復している。「経済・経営・商系統」は2023度の100から2024年度は96とやや減少している。理系の「理学系」100、「工学系」97、「農水産系統」105と「文低理高」は継続している。「医歯薬系統」では、医学114と人気を集めているが歯学93、薬学は95と志願者を集めていない。特に下位校は大幅に志願者を減少させている。看護・医療系統(医・歯・薬を除く医療系)では、看護92、保健94と減少が続いている。入試科目の多さと入試問題の難しさが影響していると思われる。

大学別では、最難関の上智・早稲田・慶應は前年指数2023年度97→2024年度100、関東の明治・青山学院・立教・中央・法政は同98→101、日本・東洋・専修・駒澤は同98→100、近畿の関西学院・関西・同志社・立命館は同104→104、京都産業・近畿・甲南・龍谷は同101→95で、上記掲載校のトータルでは増加している。マクロ的には、国公立大の併願対象となる上位校が安定して志願者を集めている。

女子大は関東の津田塾・東京女子・日本女子は同91→93、近畿の京都女子・同志社女子・甲南女子・神戸女学院・神戸女子・武庫川女子は同80→94と志願者数の減少が続いている。地方の難関大の状況は、中国・四国地区(広島修道・松山)を除いて志願者数が減少している。

《2025年度受験のアドバイス》

少子化が続いている状況で、2025年度から新学習指導要領に基づく入試に変わる。しかし、1~2年は旧学習指導要領からの出題もある。「過去問」にも取り組んでおく必要がある。

総合型選抜や学校推薦型選抜の年内入試は2025年度も2024年度と同様の展開になり総合型選抜の志願者が増加すると推測される。国公立大と併願対象となる私立難関大は2024年度と同様に志願者を集めるだろう。しかし、難易が中堅以下の大学は志願者数を減少させる展開になるだろう。

志望校選びにおいて偏差値を重視しすぎると、「隔年現象」に翻弄されることになりかねない。入試はマクロ的には易化しており、偏差値だけではなく、どのような大学に進みたいのかを考えることが重要となる。

(文責：大学新聞社)